

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
（地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業）

成果報告書

団 体 名	東京藝術大学演奏芸術センター	
施 設 名	東京藝術大学奏楽堂	
助成対象活動名	普及啓発事業	
内 定 額（総額）	2,762	（千円）
公 演 事 業		（千円）
人材養成事業		（千円）
普及啓発事業	2,762	（千円）

（２）平成３０年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概 要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場			
1	藝大アーツ・スペシャル ～障がいとアーツ～ 2018	12月1日（土）・2日（日）	出演：金澤翔子氏および川畠成道、ならびに藝大フィルハーモニア管弦楽団、支援学校・支援学級の生徒や児童ほか。	目標値	1,000・300
		東京藝術大学奏楽堂		実績値	799・250-260
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	1,000・300
				実績値	799・250-260

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

これまで積み重ねてきた8年の実績によって、事業は「障がい者」の特性にあわせて適切に組み立てられ、当初の計画どおりに順調に進んだ。東京藝術大学という特定の地域や団体に偏らない特性を生かし、社会に幅広く本イベントの目的や意義をアピールすることができた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

「藝大アート・スペシャル 障がいとアート」は、障がいのある方々と分け隔てなく芸術を通して交流し、現代社会に適合した芸術の可能性を追求するもので、2010年に前身となる催しが始まり、2011年から毎年開催され今回で8回目となった。「共に生きる」をスローガンとして、音楽・美術・映像・舞踊・演劇など幅広い分野を対象に、障がいの有無にかかわらず自身の心の中を表現しようとする者たちの活動を広く紹介している。本イベントの開始当初は、社会全体の「障がい者」に対する関心が低く、東京藝大内においても本イベントを開催する意義の是非が問われたが、回を重ねるごとに一般の意識も変わり、今では2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて「社会的包摂」の重要性に多くの人々が気づき始め、ダイバーシティ、インクルージョンをテーマとする本イベントへの興味が急速に高まっている。東京藝術大学の開設授業「障がいとアート」の受講生とともに、台東区内の小中学校の特別支援学校や、関東圏の支援学校、福祉施設を訪問し、障がい者との親密なふれあいの中で制作したオリジナルの作品を発表することによって、一過性のイベントではなく、地域社会に深く根ざした、持続性のあるイベントとなっている。

2015年から藝大は、文部科学省とJSTによるプロジェクト「センターオブイノベーションCOI」の拠点に認定され、科学技術系の企業と連携して、障がい者がより自由に芸術表現活動するための新しい楽器や補助機器を次々と研究・開発しており、産官学連携による社会実装としても大きな成果をあげている。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

第1日目のワークショップには54名、第2日目のコンサートには799名の来場者を迎え、客席から演奏に参加した障がい者や、来場者にはカウントされないホール・ホワイエの展覧会に出展した美術作品の制作者・制作団体（約300名）を加えると、目標値を上回る参加者数となった。また出演者には、文科省による「スペシャルサポート大使」に認定された2人のアーティスト金澤翔子氏（書家）および川畠成道（ヴァイオリニスト）、ならびに藝大フィルハーモニア管弦楽団を中心に、障がいのあるプロの演奏家やアーティストたちを迎え、運営・制作は、支援学校の教諭、福祉施設の療育士、芸術系大学指導者、東京藝術大学演奏芸術センター、東京藝術大学COI拠点、東京藝術大学社会連携センターが担当。また、支援学校の児童たちが配布プログラムの作成（製本や印刷など）を行うなど、出演者の表方みならず、舞台の裏方にも、障がいの有無をこえて参加・協力することができた。視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、肢体不自由、発達障がいなど多種多様な障がいをすべて対象とする芸術イベントは数少なく、本学がプロデュースするからには芸術として質の高い作品の創造を実現した。来場した障がいのあるお客様へのアテンドには、視覚障害の研修を受けたボランティア、手話通訳のボランティアを配備し、点字プログラム・大文字プログラム、筆談を準備した。客席には車椅子エリア、磁気ループ設置エリアを広範囲にわたって設けた。また開催前の段階から、障がいのあるお客様の申し込みメールアドレスを告知し、最寄駅までの送迎や障がい対応席の確保などを徹底した。磁気ループと抱っこスピーカーを客席に配備（補聴器に舞台上の音響や振動を拡声して伝える装置）、手話通訳者を立てることによって聴覚障がい者がコンサートを十分に楽しむことができた。視覚障がい者のアテンド・車椅子アテンドの講習会を受けたスタッフを会場内に配備することによって、視覚障がい、肢体不自由のあるお客様が安心してコンサート会場に出かけられる。会場スタッフはiPhoneにUDトーク無料アプリをダウンロードしておき、聾唖のお客様に対応した。点字プログラム、拡大文字プログラムは、視覚障がい者のみならず高齢者にも有効。音楽を映像化することによって、障がいの有無を超えて多くの観客がコンサートを多面的に享受することができた。弱視の観客のために、金澤翔子の揮毫のライブ映像を舞台上のスクリーンに投影した。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

- ・事業期間について
新年度4月から準備を開始し、ほぼ計画通りに進んだ。12月1日・2日の2日間の事業開催期間と事業内容のバランスが適切だった。
- ・事業費について
寄付金及び協賛金を150万円見込んだが、実際には95万円の収入となりその分自己負担が膨らんだ。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

日本全国から、「障がいとアーツ」に関心を持つ様々な分野の研究者・教育者・芸術関係者などが来場した。2日目のコンサートの概要を以下に記すが、東京藝大だからこそ創造しうる質の高い内容であることが認められよう。開幕において世界的な書家・金澤翔子が揮毫したのは「絆」。人々が繋がることの大切さを金澤自らが客席に語りかけた。続いて、視覚障がいの観客に舞台や客席の広さを「音の残響」で伝えた後、藝大フィルハーモニアと指揮者梅田俊明が登場しコンサートの開始。第1曲は、夢枕獏作词・松下功作曲の「ひかりのき」が世界初演された。昨年の「障がいとアーツ」で金澤が揮毫した「光」という文字に感銘をうけた夢枕が、その驚きと感動をその場で詩にし、松下功が来年までに作曲すると奏楽堂の舞台上で約束して出来上がった作品である。

そして18世紀前半イタリアの作曲家ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲集〈四季〉から、山崎貴子の独奏で「秋」を和田淳氏による収穫の秋を描いたアニメーションと組み合わせ、視覚障がいのある川畠成道の独奏で「冬」をブルガリアのテオドル・ウシェフ氏による共感覚的なアニメーションと共に上演。藝大C01拠点とヤマハ株式会社とで現在共同開発中のAI（人工知能）を使った映像同期システムにより、人間の生演奏のテンポに合わせて映像が再生された。

第2部は、奏楽堂ホワイエに、障がい者と藝大学生が共同制作したガンブラ（ガンダムのプラモデル）とそのジオラマを展示したことに因み、機動戦士ガンダムの主題歌「翔べガンダム」をオーケストラにより演奏。

毎年恒例となった筑波大学附属聴覚特別支援学校の小学部6年生たちの小太鼓演奏と藝大フィルハーモニア管弦楽団との共演によるJ. シュトラウスⅠ作曲〈ラデツキー行進曲〉では、梅田俊明と同支援学校音楽教諭・山本カヨ子の指揮により、音量を視覚化するアプリ（藝大C01拠点による開発）を使って聴覚障がいのある児童たちが音の強弱をコントロールしながら見事なアンサンブルを繰り広げた。またベートーヴェンの「第九」日本初演から100周年の今年、東京都立八王子特別支援学校の合唱部が〈歓喜の歌〉の有名なメロディと高度な歌唱技術が要求される最後の部分をドイツ語で完璧に歌い上げた。

クライマックスを飾ったのは松下功の傑作、和太鼓協奏曲〈飛天遊〉。この曲の初演者である世界的和太鼓奏者・林英哲の多大な協力により、彼の弟子はせみきたの指導のもと全盲の和太鼓奏者・片岡亮太が、ダブル・ソリストによる〈飛天遊〉に挑んだ。2台の和太鼓とオーケストラの丁々発止の掛け合い、白熱するカデンツァ、まさにすべての演奏家たちの愛と祈りが一つになった。演奏後、片岡から「和太鼓奏者にとって林英哲は北極星のような存在。共演する機会を与えてくれた藝大と周囲のサポートに心から感謝する。」との感想があり、会場は感動の拍手に包まれた。

最後の曲では障がいとある観客が舞台の上に上がり、松下功作曲の幻想曲〈通りゃんせ〉。演奏前に藝大出身の音楽家たちが曲中の手拍子と足拍子を観客に指導し、この曲を練習してきた八王子特別支援学校生たちが客席に立って皆をリードした。誰もが分け隔てなく同じリズムを奏で、最高潮の中で「障がいとアーツ」第8回は幕を閉じた。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

東京藝術大学奏楽堂は、旧東京音楽学校奏楽堂に替わる施設として、輝かしい歴史を持つ旧東京音楽学校奏楽堂を継承する施設として、平成10年3月に新しく建設されたものである。併せて新設された演奏芸術センターの事業を核として毎年様々な事業を展開している。学生たちの日頃の修練の成果披露から、本学の特徴を生かしたさまざまな企画によるコンサートを開催しており、社会に向けての芸術文化の情報の発信基地としての役割を担っている。

直近の演奏芸術センターの主催公演の柱となる企画は、

①藝大プロジェクト

音楽学部各専攻の枠を超え、更には美術学部との連携も図る試み
年度毎にテーマを設け、時機に適い、科の特徴を表出

②奏楽堂シリーズ

音楽学部各専攻の専門性、独自性を生かしたコンサートシリーズ
各学科が中心となり、学科独自の企画・立案で実施

③藝大21

既存の概念にとらわれず、さまざまな音楽の「今」を問う企画

の3つの柱を中心に据え展開しているが、中長期的な活動として①学内のみならず学外、更には海外の大学、音楽並びに芸術団体との交流、世界的に活躍するアーティストを招聘し、学生や教授陣との共演の機会、研究及び創造発信の場として今後とも積極的にチャレンジングな、また歴史ある芸術大学ならではの豊富な資源と各界で活躍する人材を有機的に活用し、創造性が横溢し、革新的でさらに斬新な企画の発信をし続けること。

②異ジャンル分野の大学、企業、団体との交流や連携事業に取り組む。すでに「レクサス・コンサート」と題して自動車販売会社との連携事業を進めているが、将来的には連携先の要求を満たしつつ本学の人材や資源を最大限に生かせる事業、そして連携事業を通じて地域貢献や社会貢献に寄与でき、既存の事業との差別化を図って相互に利益を共有することの実現化を目指している。

今回の事業において、本学が有するコンサートホール奏楽堂の企画制作を司る演奏芸術センター、演奏企画室と、文科省とJSTによる産官学連携プロジェクト「センター・オブ・イノベーション」の拠点に認定された東京藝術大学COI拠点とが、運営・企画・制作を分担し、効率的な連携をとることができた。また、劇場は、芸術文化発信の拠点であるばかりでなく、街づくりや地域コミュニティの再生の役割を持った「社会包摂」の担い手となることが求められていることにも、大学組織として最大限に応えることができたと思う。本イベントに協力した施設や学校は、青山学院大学総合文化政策学部、金沢大学「子どものこころの発達研究センター」、産業技術大学院大学、台東区立特別支援学校、筑波大学附属桐が丘特別支援学校、筑波大学附属聴覚特別支援学校、東京都立八王子特別支援学校、横浜市立ろう学校、社会福祉法人愛成会。協力した企業は、ヤマハ株式会社、ベネッセこども基金、RamAir.L.L.C、台東区手話通訳者の会、視覚障害者生活支援センター。後援は台東区教育委員会、横浜市教育委員会。これらすべての団体・組織が「芸術」を通して共に一つのイベントを創り上げた。これは8年間かけて築き上げた連携体制であり、今後も、本学が社会的包摂事業を進めていくにあたり、さらに組織間の繋がりが深まっていくものである。